

心理リハビリテーションキャンプを続けてきて 分かったこと

丸山千秋¹⁾ ・ 武内智弥^{2) 注)}

¹⁾ 青山学院大学教育人間科学部心理学科

²⁾ 青山学院大学教育人間科学部心理学科非常勤講師

What I have experienced in Psychological-Rehabilitation camp

Chiaki MARUYAMA ・ Tomoya TAKEUCHI

Department of Psychology

College of Education, Psychology and Human Studies

Abstract

The 1st author has been concerned in Psychological-Rehabilitation camp over 40 years. After becoming a teaching staff at Aoyamagakuin University, I have held my own Psychological-Rehabilitation camp, called “Tokyo camp”, former “Keihin-Keiyo camp”. In this article, what an important thing is to continue the camp, how a group forms an cooperative organization, when a camp promote a trainer and trainee’s psychological growing, and how we overcame the declined motivation matter, are discussed by my experience.

Not only Dohsa-training but the whole program in Psychological-Rehabilitation camp has something useful for clinical effects. I hope every individual of participants in Psychological-Rehabilitation camp, share each hardship, find some fulfillment, have awareness of a member of this camp, and provide group dynamics, in the days ahead.

Key Words : Dohsa-hou, Dohsa-training, Psychological-Rehabilitation camp

I はじめに

著者は、学生時代、1971年に開催された福岡県の福岡市から飯塚市に抜ける八木山峠にあった八木山ユースホステルで開催されていた最後の心理リハビリテーションキャンプ（以下、キャンプと記すことがある）に参加したことをきっかけに、そこから、2018年現在まで、50年弱、キャンプに携わってきた。運営の取りまとめであるマネージャーとして各地のキャンプを企画することはあったが、1981年に、青山学院大学に赴任し、翌年の1982年夏には、自分のゼミの学生を中心にトレイナーを集め、第1回京浜京葉キャンプ（現、東京キャンプ）を実施した。

1回限りではなく、自分がやれる限り長く続けていこうという決意をもって始めたキャンプであったが、学生たちに、これがキャンプだということを全力で示して、それで付いてきてくれる人たちと一緒に続けていこうという気持ちでいた。実際、ゼミの一期生の人たちが、思いきって、必死になって取り組むことが出来る人が揃っていたことに救われ、ここまで続けてくることができた。お高く留まっていたは、キャンプはできない。

自分が責任者として、総てを企画する立場となり、変えるべきでない所は変えないという強い方針（丸山、2000）をもって続けてきた。体調を崩してからは、キャンプに参加したり、直接現地に

赴いたりすることが難しくなったが、また、数値で示されるようなデータはないのだが、これまでの経験を振り返って、キャンプを続けて来て分かった“ジャージ系の心理臨床の真髄”について以下に、考察する。

Ⅱ キャンプを続けること

Ⅱ-1 続けようとして続けるためには積み重ねが必要

キャンプを続けることは大変なことだと感じている。続けることは、単なる繰り返しではなく、積み重ねだからである。そして、積み重ねというのは、その中で、いろいろなことが洗練されていかなければならない。運営の仕方であったり、訓練の仕方、学生への指導の仕方が、洗練されていかなければならない。集団療法や訓練、学生への働きかけなどと、どういうことがダメで、どういうことがうまくいくのか、そうした検討の積み重ねをし続けることがキャンプを続けることだと言える。何を棄てるのか、何を拾うのかを常に意識して、常に、その結果をフィードバックとして受け止め、検討し、活かしていくことが必要である。

以上のように、積み重ねを強調するのは、積み重ねがないキャンプは、続いていかないのではないかと感じるからである。例え、それが素晴らしいことでも、同じことをただ繰り返すだけになれば、毎年がただの行事程度のあなあななものになってしまう。そうではなく、その年のキャンプが、今年のキャンプとして感じてもらえるようなキャンプをつくっていくことができるからこそ、心理臨床としての意義をなすキャンプが続いていくことだと考えている。その組織が、発展する道を進むのか、廃れ、崩れていく道をたどるのかの分かれ道である。

スポーツの強豪校のことなど、どの業界でも同じことであるが、一回途切れたものを立て直すことには、多大な労力も膨大な時間も必要となる。立て直しというのは、大きく開いてしまった穴の部分を補修するだけでなく、それに加えて、時代の変化に合わせた新しいものを入れていかなければならないからである。元に戻ろうという立て直しの方向性でいるだけでは、以前と同じ水準の達

成はできず、目指すべきものの形は時代に合わせて変わってしまっているのか、何を目指して良いのか、といった模索は、とても方向性の見えにくい大きな迷いの中で行わなければならない。

キャンプを続けるためには、持続的な努力が必要である。常に場の状態に気を張って、もし崩れかかってきたと感じたら、それは早めに補修しなければならない。

Ⅱ-2 キャンプをつなぐために工夫してきた伝え方

トレーナー達やスーパーヴァイザー達は、多くの場合、そのキャンプの歴史に連続して参加している訳ではない。それができるのは、このキャンプをスタートさせた自分だけである。その自分の継続してきた経験や方針、自分が大切に想っていることをどうやって説明していくか、それを参加者全員にどう還元していくかが難しいことである。人もツールも変化するため、常に同じやり方で通じる訳ではない。

そこで、どういった工夫をしてきたかというと、事前に丁寧に説明することはもちろんだが、一番は、伝えたいことが起きているその場で説明し、具体的に指示を出すことである。例えば、我々のキャンプでは、キャンプの流れ(丸山, 1987)を重視するが、キャンプ中のある場面で、集団療法の司会が失敗したことに気づいていなそうな場合には、その後すぐに呼び止めて、「さっきのあの場面で、あなたは〇〇な風に働きかけたけど、これじゃ集団(皆)は動いていかないよ」とか、「あそこで、間髪入れずに、司会が指示を出さなかったから、流れが切れたでしょ」といったことを、その場で確認することにしてきた。

それを伝えられた本人が、流れが切れたことに気づいていなかったり、流れが切れる感覚自体を分かっていない場合には、より丁寧に「あなたが〇〇な風にやって、こういう流れができていたのだけど、あの時に一言こう言ったことでスッと流れが切れてしまったでしょ。それに気がつかないとダメだよ」ということを、さらに具体的に伝えるようにしてきた。そうして、具体的に、今のような感覚が、流れが切れた時の感覚であること

をつかんでもらえるようにしてきた。著者が伝えたいのは、マニュアルで記すことが出来るような手続きのことではなく、こうしたキャンプ本番の中で生じてくる、その場の感覚のことが多い。

キャンプが始まる前の準備期間であれば、具体を伝えながらその背景にある抽象を考えさせるようなことができるが、キャンプ中では、その場で即座に修正して分かりやすさを狙うと共に、次の機会も同じミスを繰り返すことにならないようにしなければならない。そうして伝えた後は、その人がどう理解したかを確認することになる。この確認は、言葉でするのではなく、その人がキャンプでの動き方をどう変えたかや係の仕事の進め方をどう工夫し直したかとか、キャンプという組織・集団に対してどういう風に参加して関わりをもつようにしているかなどを見て行う。その確認に応じて、また、次の指導をするのか否か、するなら何を伝えるのかを考えていくように工夫をしてきた。著者が大事にしてきたものは、こうした人と人との相互作用の中で生じる箇所のことが多く、それらについては、人と人との間で起こってきたものから伝えていくしかないと感じている。

また、東京キャンプでは、上下のつながりが強く、仲間の行動など一つ一つがキャンプにとってどういう意味があるかを親身に考えてくれる人が多かったと思っている。行動の意図や結果、その意味について質問や意見をしてくれたりすることである。日常のビジネスライクな関係の時よりも、歯に衣着せぬ表現になることもあるから、言われた側にとっては痛いんだけど、それだけ、肉のついた指摘が生まれる。キャンプでは動作訓練(以下、訓練と記すことがある)のスーパーヴィジョンも含めて、総てがライブで行われる。後から、会話のテープを起こして報告するのではなくて、その場でやっていることから「今、何やっているの？」などと投げかけられる生の感覚、生の指摘がキャンプにはある。

よそのキャンプに著者のところの学生が参加させてもらう時、その学生にはそこのキャンプの文化を学んで来るようにと伝えていた。それは、そのキャンプを形作っているもの、根本にあるもの、見えているものの裏にあるものを学んでもらいた

いと想ってのことである。そういう姿勢で参加して、どうやってこのキャンプが組み立てられているのかを掴めないと、そのキャンプの一員にはなれないと感じるからである。

その地域でやられているキャンプが、どういう経過で組み立てられているのかを理解せずに、やたらめったら、自分のキャンプではこうなんだと、自前の論理を振り回している人が、そのキャンプで通用するはずがない。スーパーヴァイザーとして、よそのキャンプに参加させてもらう場合も同じである。ミーティングなどでも「〇〇キャンプではこうやってる」と、振りかざすような形だと通用しない。そのキャンプの文化を理解してから行う発言・提案は伝わっていくし、もし、誤解があるような場合にも、その誤解を解くような方向で話し合いをすることができる。誤解を元に戦って「外様のスーパーヴァイザーのくせに」と思われるのではなく、せっかく一週間苦勞を共にして、皆と一緒にキャンプを作るのだから、このキャンプについて一緒に考えましようということを示せるかどうかを大事にしてきた。

自分たちがやっていることの意味がわからないと、キャンプ全体の流れはチグハグになり、参加者の気持ちはバラバラになりがちである(丸山, 1989)。以上のように、キャンプにおける文化をきちんと掲げ、理解し、一緒に目指し、常にそれを向上させていこうとすることが、キャンプがつながっていくことだと考えている。

Ⅱ-3 繋ぎ方はさまざま

キャンプは、大学教員と学生が中心になっている場合もあれば、特別支援教育の教員や親の会が中心になって運営している場合もある。それぞれのキャンプにおいて、その時その時の功勞者や立役者のような人がいて、その歴史が紡がれてきたものだと思われる。そうして、代々の参加者が繋いできているはずである。そうした際に、先頭に立って旗を振る人がいるだけでは繋がらないが、先頭に立ってそのキャンプの方針を唱える人がいれば、繋ぎの補強手段程度の意味にはなると考えられる。

大事なものを繋ぐという方法は、マニュアルの

ような、はっきりとした形に限ったものではない。例えば「こういうことをしたら先生に叱られるぞ」とか「こういうことを先生は好んでるぞ」とか、そういう言い方で引き継がれるものもあると思う。著者の場合、旗振り役の立場の本心としては、「こういうやり方をしたら、こう良くなるよ」とか「こういうやり方を採るのは、こういうことを強調しているからなんだよ」などと先輩・後輩の関係の中で補足説明をしてもらいながら、伝わってほしいと思うことがある。各学年の中心になって働いている人たちが、そういうことを伝授してってくれるように、いつも願っている。

東京キャンプでは、各係のチーフが次年度のチーフに引き継ぎをすることになっているが、事細かに「〇〇を〇個用意しておく」などと、やたらに引き継ぎの項目が多いところがある。係によっては数を揃えることが現実的に必要なこともあると思われるし、チーフになる人のパーソナリティもそれぞれなので、細かく引き継ぎたい人もいだろうし、所要所で引き継いでいく係もあるだろうと思われるが、いずれの係においても単なるマニュアルを作るのではなくて、そうするための根本は何かということを引き継いで欲しいと伝えてきた。

前年と同じように引き継ぎをしてもらっても、通じていない時もあるし、引き継がれた内容について実感がある人とならない人では、引き継ぎ方が違うのは当然である。また、引き継ぎの時には、大事なことがうまく伝わらなくても、それは準備をしている時にうまくコミュニケーションをとれば、修正することができる。しかし、各係のチーフが私へ報告をしてくる仕方が一方的だと、そこで修正したくても、修正しようがない。本人はそれで報告したつもりなのだろうけども、何のために報告をしているのか、キャンプを作っていく上で何を大切にしているのかまでを、考えて報告をしてきていないのが丸わかりである。

東京キャンプでは、キャンプ前の準備で、各係ごとの集まりやミーティングの他に、全員が一堂に会する準備会を3回設けることにしている。この回数は、参加者の負担と準備の進行具合を鑑みて設定しているのだが、目的としては、何を大事

にしているのかについての全員のコンセンサスを高めるために設定している。

Ⅲ キャンプで人が成長することとは

Ⅲ-1 キャンプの中で自分を超越する経験

ひとが成長するということについて、簡単には表現しきれないけれども、ひとが成長するには、他の人と交わりながら、自分が要求されている行動について、適切な状態で対処できるということが、大きく関係していると考えている。キャンプでは、自分の課題について向き合い続けることになり、その場から逃れることも出来ないし、トレイニーのためにという目標に皆が真剣になっているために、オフィシャルな指導以外にも、お互いに強烈なフィードバックがある。動作訓練の中で顕れてきた自分の課題は、他者を通じた総ての活動の中に同じように顕れてくる。つまり、係の仕事の中でも顕れてくるし、集団の中での立ち居振る舞いとしても顕れてくる。そのために、キャンプでは自分の課題を、意識し続けられる。そうして、最初は意識しようと思うけども、そうまで努力をしなくとも、自然とできるようになればなお良いと考えられる。

キャンプは、トレイニーも、親も、トレイナーも、スーパーヴァイザーも、参加者皆が成長できる場（丸山，2008；清水，1987；武内，2012）とされている。これは、成瀬が、キャンプ全体が臨床の場となるように、設計したためである（武内，2010）。なぜ、キャンプでひとが成長するのだろうか。このことを考えた時に、最初に浮かぶのは、キャンプは、自分の中から、でも、自分を越えたものを引き出してくれるからだ、ということである。参加者全員がそれを引き出されている。逆に言えば、キャンプを運営する側はそれを引き出せるように運営しなければならない。ただ、宿泊して訓練を行う場を提供しようという意識では、そのような要素を高めたキャンプにはならない。

少し話はそれるが、運営として気をつけなければならないもう一つのことは、当然のことであるが、参加者一人一人の状態を把握することである。例えば、自分を越えたものを引き出される過程で、何かの壁にぶつかったり、穴にズボンとハマって

しまう人もいるかもしれない。そこで、キャンプに参加している皆が、その人を慮って動いていくものである。あの人は、ちょっと大変そうだな、辛そうだなと思えば、その人をサポートするようにして、仕事の割り振りも同じ係の人がカバーをするなどと、お互いを慮って、乗り越えていくものである。誰が現在しんどそうな状態にあるか、そして、その周囲がどのように関わって、対応しようとしているか、マネージャーやキャンプ長がもう一步、働きかけた方が良いのか、などと無数の検討がある。

話を戻すと、キャンプは集団生活であるため、良くも悪くも、そのような人間同士の付き合いが強い。著者はもともと、人間関係やひと付き合いが苦手であった。でも、苦手だったからこそ、一生懸命にキャンプをやったのかもしれないと感じている。もともとは、人前で歌ったり、司会したり、リーダーシップをとって、ひとに指示を出したりそういうことは出来ない人間であった。そうした自分のプロセスを振り返ってみても、キャンプで、役割上やるしかないからやっていくという中で、いろいろな経験をして、自分を越えたものが引き出されていったと感じている。

Ⅲ-2 成長に必要な要素：役割を執るということ

自分に与えられた役割を執るためには、その場の状況がわかっていて、なおかつ自分が次に何をしたらいいのかが分かっているといけいない。臨機応変というものも、自分の周りをいきなり通り過ぎていくものを感じながら、どうやってそれに対処していくかということだと考えている。固定されたもので、対処していくのではなくて、何か向かってくるものがあれば、それに対して、どうやって対処するのが良いのかを瞬時に判断して、それを選びながら、対処していくものである。自由気ままに右に左に行くことを臨機応変と捉えるのではなくて、何を選んだら一番良い方向に行くのかという選択をしながら行くことである。そして、それを選択するのに、その場の状況を見る力がある。

このような人の動きを読むとか、キャンプの流れを読むとか読みの努力も必要である。「この

人がこう動いたら、こっちの人はこうしか動けないだろ」「じゃ、そこどうするよ」などという力や努力が必要なんじゃないかと考えている。ただ、客観的に読むのは、指標がないのでとても難しいことである。その時に、自分の満足や不安を感じないことが指標・基準になりやすいものである。つまり、その人の認知が歪んでいると状況を歪んで受け取ってしまう。

役割意識が固かったり思考が固いと、いろいろなことが同時並行で入ってこないものである。著者がキャンプに参加し始めた頃に、与えられた苦手な役割を嫌々ながらにやっていたら、役割意識は身につかなかったと振り返っている。著者にできるのはキャンプしかないというように想っているところがある。この意味では、ここまで検討したことも、凝り固まった考え方をしてしまうと、それもダメになってしまう可能性がある。キャンプは皆が成長できる場と同じことばかり言っているの、これについても凝り固まっていないか、凝り固まったものと思われていないか、常に振り返っている。

Ⅲ-3 役割を意味あるものにするために：自分の欲求を棄てること

心理臨床をやる上で、自分の満足や不安というものをきちんと振り返ることができなければならない。例えば、人が楽しそうにしているとか喜んでいたりとか、それも自分の満足に入れてしまう人がいる。そうではなくて、この人が喜んでいても、あの人も喜んでいても、そういう喜びの顔を見つめているうちに、自分も満足するっていう満足であってほしい。キャンプにはたくさんのエネルギーを注ぐことになるのだが、満足というのは、この人を喜ばすためにやっているっていうのではなく、その人が喜んで自分が満足できるけど、それよりもおっきい満足が相手に与えられるかどうかという、自分よりも、そこに参加したトレイニーが喜んだら良い、という感じが望ましいと考えている。

しかし、私たちは、なかなか欲を棄てられないものである。目立ちたいとか恥ずかしいという気持ちもそうである。そして、逆にただただ、集団

療法係が目立っているような集団療法も、集団療法ではない。また、一人が目立っているようなキャンプもキャンプではない。本来ならば、全員が主役として輝くことができれば良いのだけでも、現実問題としては役割上裏方になる人も必要である。それが集団でやっていくということだと思っている。集団療法係が、かぶりものを被って前に出ることが好きなキャンプがあるけども、どういう意図でそれをやっているのか、目立ったり、笑いがとれれば満足できるというのは違うと思っている。これも、誰の満足かという、自分が目立って満足できるというのはよく分かるのだけでも、それで、他の人も満足させられるのか、それで、どっちも満足できれば、それに越したことはないのだけれど、それは難しいことが多い。自分のアピールばかりする人は、アピールすることが自分に必要だから、やっているのだらうけども、ただ、その場は(他人は)それを必要としていなくて、「また始まったか」などと思う。それが分からないのは気の毒に思う。

自分の想いと人の想いのギャップを検討してることがなかったのだと思う。キャンプでの各役割はその場に貢献できるか否かであって、目立つことが多い係が目立てば良い訳でもなく、裏方の係がでしゃばって目立とうとして良い訳でもない。自分の欲や安心を優先する場として考えるよりも、ある意味、自分を棄てるという作業が必要である。これは、捨て身になれるかどうかといった気分にあたるのではないかと思われるが、とても勇気が要ることである。皆の前に出るのに、かぶり物もそうだが、お人形さんを持って出て、それを喋らせる人も棄てられていない、生身で出てこられないという場合がある。自分の安心にしがみついて手放せないところから、そうした何かを棄てて、役割として必要なことを行っていく中で、勇気をもてるようになっていくものだと感じている。

また、客観的に捉えるためには、「自分の立場から見るとこうだけど、一般的に見るとこう」「今自分は楽しいけど、辛い想いをしている人もいるかもしれない」というように複眼的に見ていくことも必要である。集団療法を進める時に、トレイ

ニー達が、どんな表情で参加していて、それはどんな気持ちなのか、こういうことを確認しながら、進行して行かなければ、進む方向が無茶苦茶になってしまう。

Ⅲ-4 役割を意味あるものにするために：人の配置について

適材適所に人を配置できるというのは、何にしても必要なことである。ただ、検討して人を配置しても、その役割は自分の役割じゃない、と反発する人もいるから難しい。今、現在は適していないとしても、トレーニングになって、将来的に有意義な場合も多い。キャンプにおいて、不適材不適所というか、あえて、そういう人をチーフにしたりすることがある。そうすると、最初のうちは、いろいろな作業上の壁に当たって大変だったけれども、一回腹を決めたらちゃんとやってくれることがある。そういうことが起きることを予想して起用するのだが、つまり、その人をどう剥くかという話である。

どうなるかなんて分からないけども、剥けるまでの苦労をしている時に、他の人にどう影響するか、周りが耐えきれずにやられてしまうと、本人もダメになってしまうし、とても気を使う配置である。「この人がこうなったら、あの人がこういう風に行動するだろうか」「逆にこうなったらどうなるかな」という人と人との絡みの複雑な思考になる。考え出すと決まらなくなっていく場合が多いのだけれど、そのチーフと係員の普段の人間関係、チーフのリーダーシップ力のことも考えるが、係員が強制力ではなくて、チーフに反発するよりチーフのために働いていこうと思ってもらえないといけない。未知数がかかなり含まれているので、最後になったら、できるだけ障害を排除しておいて「えいや!」とこっちも覚悟を決めるしかない。

Ⅲ-5参加者の成長を後押しするキャンプとは

キャンプは、ただただプログラムをこなせば効果的なものになるのではなくて、仕掛けを行う必要がある(丸山, 2011a)。盛り上がりのないキャンプは、最終日までずっと沈んだキャンプになっ

ていってしまうし、“流れががつんがつん停まると、5泊6日は非常に疲れる”（丸山，2011a）ものである。著者の経験したキャンプの中にも、後半まで盛り上がり欠けるキャンプがあった。この盛り上がり欠けたまま、最終日に近づいてきて、何かできることはないかと検討し、結果、風船バレーを試したことがあった。話は脇道にそれるが、風船バレーは、司会に非常に大変な役割があつて。それが当たればバツと盛り上がる。あの時の司会は飄々としてやっていて、集団がそこまでの役割を担っているとは思っていなかったのではないかなと思っている。

もちろん、キャンプの流れは、計算通りに行く時と行かない時とある。計算通りに行かない時は周りで盛り立てることでフォローすることもある。例えば、集団療法係ではなくて、自然発生的な感じで、食事の際の手拍子のリズムを、変則的になるように仕掛けて盛り上げたことがある。周りが盛り上がっていけば、自然と盛り上がって一体感が増して行くだろうということも仕掛けになっていく。あれで雰囲気壊れてしまったら失敗であったが、「なんか変わったことやってるな」と注目して、皆が載ってくれば大成功である。あの時には、載ってもらえるように、できるだけ大きな音で変則的なリズムの手拍子をして、周りのトレーニーが載ってくれる人が多かったから、うまく行ったと思っている。

Ⅲ -6 キャンプにおける充実感

学生時代の同期にキャンプの運営が本当にうまい人がいた。その人のキャンプなら参加したいと言われるような人であった。とても人に気を遣える人だが、きちんと人を割り振って指示を出す。その人がマネージャーのキャンプは、肉体的にはすごく疲れるけど一週間の長丁場のキャンプでは若い学生といえども疲れ切るのが当たり前であった。また行きたいと思われる何かがあった。その何かとは充実感だろうと考えている。

キャンプが盛り上がることと、そこでの一体感とは、もしかしたらイコールなことなのかもしれないが、盛り上がって一体感が出てくると、キャンプに参加している皆が「このキャンプは、自分

たちが作っているキャンプなんだ」というように、この個々の努力が全体を作り、全体のダイナミクスが個々に戻ってくる。そこに戻ってこない、せっかく盛り上がっても意味がない。そうして、自分はこのキャンプの一員なんだと感じて、またキャンプに臨むというサイクルができてくる。こうした、みんなでキャンプをつくっているという感じが出てくると、何をするにも「せーの」で動いてやっていくことができる。

それゆえに、先に述べたように、ただ司会が目立ったり、一部のメンバーが、騒いで盛り上げれば良いと思って実行される活動には、こうした効果が少ない。著者らが、自分たちのキャンプのスローガンとして掲げている“手づくりキャンプ”（丸山，1985）というのは、キャンプで使用するものを何でもかんでも手づくりしなければならないという意味ではない。

全く同じメンバーで、翌年もう一度キャンプをやっても同じキャンプにはならず、人が変われば同じキャンプにならないのはさらに明白なことである。そういう意味では、参加者一人一人の誰しもがキャンプに影響を及ぼす一員であるのだけでも、一人一人にその実感が出てこないと集団での意識（安好，1979）をもったグループとして、一つにはなれない。例えば、メンバーの中に、自分の感じ方と他人の感じ方は違うと頑固に主張する人がいると、一体感が出来かけても、出来上がる前に崩れていってしまう。その時に皆が繋ごうとしている輪が繋がっていかなくなるからである。

一人一人の充実感は、自分たちがやっていること、自分たちが努力していることが、キャンプに役に立っているというように感じてもらえることであり、それが、著者が目指している参加者全員でつくる“手づくりキャンプ”（丸山，1985）である。そうした意味では、人間性というのは、これらのキャンプの面白みをかもし出す要素である。

以上のように、我田引水のような話で気味が悪い感触があるけれども、キャンプが盛り上がると、大変なキャンプであっても頑張りがやくなるのは、皆で頑張ろうという感じが出るからだと思

えている。そうすることで、動作訓練の成果も効果的に高まると感じている。こんなに集団療法で工夫をするキャンプは、もはや珍しいのかもしれないが、キャンプの各要素は、動作訓練のための二次的要素ではなくて、それ自体が必要なものという考え（針塚，1987）に、著者は賛成している。最大限の訓練効果を収めるために、訓練とキャンプの形式とが車の両輪であり（成瀬，1987）、キャンプの総てが“有機的な一体をなす”（成瀬，1970）ように、していかなければならないと考えている。

Ⅲ -7 キャンプを通じた修行

目指したい内容については役割の項で論じたので、この項では、主にキャンプの枠組みについて、検討する。

キャンプ参加者の運営上の役割は、できるだけいろいろな役割を果たしてもらって、その役割によって、キャンプがどう違ってくるのか違ってこないのかを経験してもらいたいと思ってきた。同じ役割ばかりでは一つのことしか身につかないことがある。想像力がある人は別の役割の場合のことも、実感をもって想像が付くのかかもしれないが、そういう人ばかりでもないし、毎年、実際に違う係も経験できれば、それに越したことはない。そこで、先に述べたような強烈なフィードバックを受けながら、さまざまな視点を培ってほしい。

また、通いのキャンプというやり方もあるとは思っているが、著者としては、キャンプは泊まりでやっていきたいと思っている。それは、日常生活から切り離されているからこそその集中がある（野口，1985）と感じていることに加えて、泊まりの場合には、何かに行き詰っても途中で逃げるのができないからである。途中で逃げてしまったり、リセットしてしまったりは、たどり着けない光景があると思っている。それゆえに、一緒に過ごして、同じ釜の飯を食って、同じところで寝て、一緒に苦しんだり、楽しんだりして、日常では逃げたりリセットして見られない光景、最後までたどり着いた光景までを共有して終えることができる。例えば、動作訓練上のトレーナーの課題は、係面でも、同じように顕れてくるものである。そ

の自分の課題をどうにかしなければならないという、責任感や緊迫感、悔しさや意気込みなどが、キャンプを離れることでリセットされてしまい、一回一回ネジを巻き直すというのが大変である。

一日の訓練を終えて夜になって、ミーティング後にそのまま仲間としゃべったり、夜食をいただきながら、やれたとしても自分が直面している課題を翌日まで持ち越そうとすることだけで、常に誰かと一緒にいて、一人の時間はなく、キャンプにまつわる活動以外の活動はないので、自分の課題から離れて気分転換をすることはできない。前の晩に背負いこんだものは、次の日の朝も同じように背負いこんで、それを何とかしていこうとすることで、超えられないものが超えられていくのだと考えられる。その分、苦しさがあって、だから一体感をもって個々人を後押しするような、個々が集団に抱えられている感覚になるような流れ（武内，2010）がキャンプには必要なのだと考えている。集団に揉まれる中で初めて養われるものがある（成瀬，1987）のである。

Ⅲ -8 芽が出るまでに時間がかかるトレーナー

時折、何度もキャンプに参加していても、訓練においてトレーナーとの一体感が出てこないトレーナーがいる。著者が指導したトレーナーの中に、芽が出るまでに8年程かかった人がいた。そのトレーナーは、キャンプの活動について一生懸命にやっているし、周りのトレーナーに対して影響力もあった。訓練よりも先にキャンプにおける係の方で芽が出て、係の動きとしては見本のようになっていた。それでも、訓練ではなかなか難しく、見えていても、なかなかトレーニーと二人で一緒になって努力しているという感じが伝わってこない訓練だった。脳性マヒのトレーニーではなく、情緒や行動のコントロールが主な課題のトレーニーに当たったことをきっかけに、それ以降、訓練における関係がピシッとはまるようになった。その人と脳性マヒのトレーニーとは違うんじゃないかという感じがして、組み合わせしてみたことで、芽が出ることにつながった。このトレーナーのように時間はかかるかもしれないが、働きかけながら待つことにも意味がある。

ただし、待つというのも容易なことではない。まず、最大の懸念事項は、トレイニーに不利益が生じることである。そうなのはいけない。一体感のない訓練をし続けなければならないのは、トレーナーもトレイニーも楽しいかという点、楽しいはずがない。そういう点を考えながら、でも、そうしたトレーナーには成長もしてほしいので、なんとかしないといけないと思う。

長く参加しているトレーナーのことは、それだけで、他のトレーナーも、この人はできる人だと勘違いをしてしまいやすい。そういう形上のことにとらわれずに、実質的に、伸びていなければならないと思う。先の例のトレーナーは、その後、グーンと一気に伸び、それを見て、これまでずっと中でたくさん溜めていたんだと感じた。頭の回転は速く、能力も高いことは分かっていた。きっと、動作訓練でトレイニーと関わることの面白さが分かったんだと思われた。そのトレーナーの普段の姿は、生き生きしていたのだが、訓練では生き生きしてなかったのが、訓練でも生き生きし出した。そのトレーナー自身も訓練場面で「キャンプを通じた修行」をして苦しんでいたんだと思っている。

IV キャンプは組織である

IV-1 どのような組織を目指すか

キャンプという集団は、組織である。ただ、集団になれば、自分はこうやりたい、でも、別の人はこうやりたいといったやり方の違いが出てくるのは当たり前なことだと思われる。それは自由に変えることが出来るといえば出来るのだけれど、個人のそうした想いを超えて一つにまとまる組織は、個々人が与えられた役割に徹しながらその成功に向けて（同じ方向を目指して）努力をし、一つになるということだと思っている。そういう集団になっていくことが、キャンプの準備の段階から求められていて、それをうまくまとめていく人が必要である。

著者が、そうした集団にまとめていくことを、やっていきやすかったのは、参加するトレーナーの多くが学生で、自分は教員という立場の違いがあったからである。横並びに近い組織は、その集

団の皆が納得しないと、一つにまとまって動くことができないから大変な作業になる。もちろん、学生の中にも、納得しないと動けない人とか、納得したくない人とか、反抗期の人もあるのだが、反抗をむやみやたらと潰すようにしては、その人が生きていけない。しかし、組織を引っ掻き回そうとして入ってくる人の場合には、しっかりと潰さないといけない。場合によっては、中で新しい組織を作ろうとする人が入り込んでいることもある。

IV-2 組織を維持する厳しさ

初参加の人や、まだキャンプの魅力がよく分かっていない人には、キャンプってこういうものだよという話を時折、伝えるようにしている。初参加の人は、辛い想いをしがちで、著者が初めてキャンプに参加した時には、時間が経つのが遅く感じられて仕方がなく、プログラムの一つ一つをバツで消して過ごしていた。キャンプ中は、逃れられない状況から、どういう風に自分が対処していくかという極限のような状態だと考えている。最初は嫌々ながらやっても、それでハマっていく人もいる。それを乗り越えてくれて初めて、その人が参加した意義があったことになるのではないかなと思っている。そうした人は、きっと、キャンプという檻を自分で意識し、逃げ出さない中で「仕方がない。ここんとは載っておこう」といったように、騙されたと思って（丸山，2015）その中に入っていくながら関わっていったのだと思われる。

中には、その回のキャンプでは乗り越えられない人もいて、次回のチャレンジになる。残念なことだと思うけれども、向いていない人の場合には、そのことに自分で気づいて、決断することによって役立てられれば良いと思う。決定的に向いておらず、ここまで周りをよく見てくれる上級生がいる中で、努力もできず、自分では決断もできない人の場合には、さらに残念なことではあるが、こちらから引導を渡さなければならない。

これは、キャンプに限ったことではないのだが、何事も自分で選んだものを一生懸命に大切に、まずはそれを必死になってやってみて、やってみた

結果として違うと思ったら、そこから離れば良いことである。そうして離れたら、自分のやりたいものを見つけていけば良い。見つからないまま終わらせてしまうと残念なことになってしまう。著者は「うちで学べた人は他でも学べる。学ぶ方法をきちんと身につけている人である。だから追わない。うちで学べなかった人は他でも学べない。だから追わない」というポリシーでいる。

そうした意味では、自分が、どれだけ人を傷つけてきたんだろうと、罪の意識を感じながらいて、キャンプに参加して生き生きとしていく人もいるし、潰れていく人もいるし、引導を渡さなければならぬ人もいて、そうした人達に、申し訳ない気持ちもある。ここで見つけれなかったら、他所や多領域で見つけてくれていることを願っている。

IV -3継続させていくための一生懸命さと関わり

キャンプの最中は日中も夜もとても忙しい。それだけ忙しくて大変であるにも拘らず、一生懸命にやれたというのは、キャンプに特別なパワーみたいなものがあるのかと思うことがある。

前項で論じたように、キャンプに一生懸命に取り組むために、キャンプが好きであることは一つの要因であると考えられる。そして、何年も継続してこられたことについて考えると、「キャンプが最後の俺の頼みとするとところだ」という意地以外には無いように振り返っている。「これができなかったら俺じゃないよ」という感覚である。

そのために、ついついトレーナー達にいろいろと求めてきた。そうした時には、口調は柔らかくしつつも、かなり高いことを求めてきたと思っている。思い返してみれば、キャンプの夜に翌日の打ち合わせをしている最中に鼻血を出したマネージャーもいた。キャンプへ臨むことは、かつこよく言えば、自分への挑戦のようなもので、参加したメンバーそれぞれが、そこに向かって行っていると思っている。人に挑戦しているように見えて、自分に挑戦して、自分に欠けているところとか足りないところを補修して、いろいろなところと接触できるようにしていっているのではないかなと思う。

こうした遠慮なく、その人の高みを望む存在があると、集団が丸一丸となって遠慮なくやれるようになっていきやすいのではないかなと思っている。そのためには、指導者には、トレーナーの現状を遠慮なく見抜く力があつた方が良い。この人はここが伸びたら、もっとこうなるのになつていうことを見抜いてくれる存在の人がいて、本人が自分の上限だと思っているところを「もうちょっと、こうしろ、ああしろ」と道を示してもらいながら、ちょっと穴を開けて、少しそこに向かうイメージである。もう精一杯、頑張っている人に、「これ以上、頑張れ」とは言いにくいのだが、そうした際には、ある程度、その人がもうちょっと先に行けそうな感じがしてくるものである。ただし、それを高みから物をいうような形ではなく、準備の段階から、自分も一緒になって苦労をしているから、言うことができるし、受け入れてもらえるものだと感じている。顧問のような形で、一緒に苦労をしていないのにも拘らず、物を言えるほど無責任にはなれない。

やはり、キャンプには、いろいろなやり方があると思うのだけでも、著者は「義理と人情」でやってただけである気がしている。結局、キャンプは、義理と人情に厚く、それで切り盛りしていくしかないのではないかな。それが著者が目指していた手づくりでもある。古いのであるが、そういうことが世の中自体に無くなりつつあるから、キャンプにおいては、そういう点は残って欲しいと思っている。

V トレーニーと親にとってのキャンプ

V -1 トレーニーの成長

トレーニーにとって、キャンプは行きたくないけど、行っちゃうっていうくらいには感じてほしいと思っている。特に子どもにとっては、訓練は嫌なものだと思う。難しいことをさせられるし、痛さを伴う場合もあるし。そして、自分についたトレーナーが面白くない人だったら、嫌だし。そうなると、お母ちゃんの機嫌も悪くなるし。

トレーニーによっては、周りの人との関係で外圧があることがある。人の親切さを感じることも多いだろうが、人の目とか、からかいとかを感じ

ることもあると思う。そういうことに対して、卑屈にもならず、正当に評価をして、冷静に対処して行ける、それに負けずに、自分を出して行けるようになっていってほしい。それは自分なりのからだの使い方をきちんと身につけるという訓練を通じて、自分らしさを人前で表現する集団療法などを通じて、キャンプはそれを目指せる場だと思っている。

援助者側は、トレイニーが、そうした出来事で、トレイニーの気持ちが萎えずに、自分らしさを感じたり表現したりできるように、キャンプの各プログラムをどう提供していくか、必要な状況がひょいっと出てこられる環境を作ってあげられるか、を考えなければならないと思っている。以前に参加していたトレイニーで、自分は、トラブルメーカーだと思われる、自分が悪者として皆から認知されていると思っている部分がありそうな人がいた。それが確信としてあったのではないかと思うほどであった。でも、実は、そのままの彼を受け取る場があるよっていうことをいかに示すことができるか、それがキャンプの意義となる。このトレイニーについては丸山（2011a）や武内（2010）でも触れているが、本稿はトレイナーについての言及が多いが、著者は、トレイニーも、自分の殻から一歩引き出されるキャンプを目指してきた。

V-2トレイニーの成長のために悩んだことの例

キャンプでは、多くの難しい決断を求められる。例えば、重度重複のトレイニーが熱を出した場合に、家に帰すのか帰さないのかといったことは、よく起こることである。そこで、悩むのは、安全な決断の方が気持ち的には安心なのだが、この子は今、帰ってしまうと、こういう時に耐えられない子になってしまうのではないかという想いが湧いてくるからである。帰さないで決めたのなら、覚悟して、頑張っ翌朝まで看病するしかない。場合によっては、命がかかっていることになるので、そういう決断をするのに、とても悩んできた。子どもが熱を出したり、発作が起きたりすると、その岐路に立つことになる。

また、親子で継続的に参加していた成人トレイ

ニーが初めて一人でキャンプに参加し、キャンプ最終日に親が迎えに来ることになっていたが、親が、キャンプ最終日前日の打ち上げでそのトレイニーがどうなってしまうかが気になって、一日早く会場に来てしまったことがあった。そこで、親を受け入れるのか、帰すのかといった決断も悩ましかったが、その時のスーパーヴァイザーとも、相談し、今、親を会わせたら、トレイニーが可哀想だということになった。そのため、結局、そこでは、気の毒だったけども、会場に近くの旅館を紹介してもらって、親にはそこに一泊してもらい、翌日、予定通りの閉会式後にまた来てもらえるよう、マネージャーから伝えてもらうことになった。

トレイニー本人が、キャンプを終えた時に「一人でもキャンプを頑張れた。良かった」と言って帰って行った。最終日前日に親の庇護の元に収まっていたら、その体験にはならなかったと思われる。わざわざ必死で、心配になって来た訳だから、親には相当に恨まれたんじゃないかと思うのだけれども、トレイニーは一人でよく頑張ったになって、親にも、子どもの自立を見守るようになって、ある意味では、それぞれの成長に切り込んだことになったと振り返っている。

VIキャンプの危機とその対処

著者としては、心理リハビリテーションキャンプは、訓練だけがキャンプではなく、キャンプのプログラム全体を一生懸命に頑張っ、それが一つのキャンプになる。キャンプ全体がそういう場だからこそ、全体が成長する場になり得るのだと思っている。世のキャンプの多くが、こういう捉え方を段々としなくなっている気がして残念な気持ちである。時代が変わっても本質は変えてはいけないという問題意識（丸山，2011b）をもち、東京キャンプは「キャンプの化石」であり続けた。

ただ、組織というのは、常に、崩れていくかもしれないし、なんとか生き延びるかもしれないし、維持していくことが難しい。組織をなくすと、そこで青春を過ごした人にとっては、実家がなくなるような感じがするのではないかと、いつでも実家に帰ってこられるように、という想い

も、著者が継続の努力をし続けてきた意地の一つだと考えている。しかし、最終的には、なるようにしかならないから、今できることを最大限努力していこうとしていく場合もある。

VI-1熱心が失われたこと

キャンプを続けるのが、もう無理だと思ったことが、これまで実は何回かある。月例会の継続が難しくなってくるとか、参加者があんまり熱心じゃなくなってくるとか、そういう問題が生じたことがあった。そうした時に救われたのは、何はさておきキャンプを大事にするように考える学生（トレーナー）が現れてきたことである。東京キャンプでは、キャンプ前に参加者全体で事前作業や打ち合わせを行う準備会を実施するが、「準備会に出られないやつはキャンプに来てはダメだ」と言っていたら、「途中1回の準備会に出られないからキャンプにもいけません」といったように、潔い人がいた。そういう人が、著者が理想とするような意識をもったキャンプを支えてきてくれたのだと思う。

そういう人は、がっかりした気分になってきている著者も驚くくらいに、恥を恥と思わず、からだごとぶつかっていくことをして、ミーティングとかで発言をしてくれたり、活動に積極的に参加してくれたりして、盛り返していく仕掛けの一つになってくれた。そういう人を中心に立てながら、会を運営していき、その活力によって、会が活性化していったことがあった。ただ、それを面白く感じない学生もいて、そのような人と人とのバランスには悩んだが、それでも、この活力を生かさないとはダメだと思った時だった。

VI-2丸山の個人史と意地

また、キャンプを続けてきたのは、自分の意地もあったのだと振り返っている。著者は、幼い頃から、その場で力を発揮できないタイプで、「今に見てろ」という想いでずっと現在まできている。ディスカッションなどでも、相手の意見について「そうか、そういうこともあるか」と思ってしまっ

てを悔やみながら、反論を考えていくことばかりの68年で、結実しない意地を抱えて、キャンプを続けてきた。

第10回の東京キャンプ（当時は京浜京葉キャンプ）で、やっと実績が積み重なってきて、日本リハビリテーション心理学会認定のキャンプになるように日数を1週間にして開催することができたが、その時から、認定キャンプの基準が6泊7日から5泊6日に1泊減らされ、それも意地をはって6泊7日のまま3年実施した。

VIIおわりに

これまでの著者は、キャンプでは、どうやったら、成果が上がるかを常に意識してきた。そのために、その時のメンバーや仕掛けによって、キャンプの一体感がどれだけのものになったか、動作訓練の成果がどれだけ上がったかといったフィードバックを、常にひとつひとつ検討して、さらなる達成を目指して、努力をし続けてきたのだと、振り返っている。

文献

- 針塚進(1987). 訓練(インテーク・訓練・母親指導・奥か測定). 成瀬悟策 (編). 障害児臨床シンポジウムⅡ「心理リハビリテーションキャンプ」, pp. 39-44.
- 丸山千秋(1985). 京浜京葉地区. 成瀬悟策(監修). 心理リハビリテーションの歩みー心理リハビリテーションの会10周年記念一, pp. 102-103.
- 丸山千秋 (1987). 脳性マヒ児の心理リハビリテーション: 膝立ちと立位の獲得. 青山学院大学教育研究, 31, 127-139.
- 丸山千秋 (1989). キャンプ・月例会の運営と親の会. 翔門会 (編). 動作とこころー成瀬悟策教授退官記念新ボジウムー, pp. 157-165.
- 丸山千秋 (2000). 巻頭言 ゴマメの歯ぎしり. ふえにつくす, 57, 1.
- 丸山千秋 (2008). 臨床動作法で大切なものは何かー雑敷さんへのコメントー. 鹿児島大学心理臨床相談室紀要, 4, 46-48.
- 丸山千秋 (2011a). 心理リハビリテーションから学んだもの. 青山学院大学心理臨床研究, 11,

81-89.

丸山千秋 (2011b). 心理リハビリテーションキャンプの運営についての検討ー心理リハビリテーションキャンプにおける集団療法ー. 青山学院大学教育人間科学部紀要, 2, 133-144.

丸山千秋 (2012). 心理リハビリテーションキャンプの運営についての検討 (Ⅱ)ー心理リハビリテーションキャンプにおけるマネージメントー. 青山学院大学教育人間科学部紀要, 3, 155-170.

丸山千秋 (2015). 巻頭言「騙されてみる」. 青山学院大学心理臨床研究, 15, 1.

成瀬悟策 (1970). 脳性マヒ者の心理学的リハビリテーションⅥ 集団集中訓練とその問題点. 教育・社会心理学研究, 9 (1), 17-38.

成瀬悟策 (1987). 〈訓練キャンプ〉について. 成瀬悟策 (編). 障害児臨床シンポジウムⅡ「心理リハビリテーションキャンプ」, pp. 1-4.

野口宗雄 (1985). 生ルチア病院における治療クリニックー週間キャンプ方式 (集中訓練) のはしりー. 成瀬悟策 (監修). 心理リハビリテーションの歩みー心理リハビリテーションの会10周年記念ー, pp. 63-65.

清水良三 (1987). 集団療法. 成瀬悟策 (編). 障害児臨床シンポジウムⅡ「心理リハビリテーションキャンプ」, pp. 45-52.

武内智弥 (2010). 動作法を用いた宿泊集団集中訓練 (キャンプ) 全体をひとつの事例として捉えた事例検討ー第2X回心理リハビリテーション東京キャンプを振り返ってー. 青山学院大学教育人間科学部紀要, 1, 269-286.

武内智弥 (2012). 心理リハビリテーションキャンプにおける係役割の体験とそれにまつわる検討. 青山学院大学教育人間科学部紀要, 3, 187-200.

安好博光 (1979). 集団集中訓練. 成瀬悟策 (監). 心理リハビリテーションの進歩, pp. 112-117.

インタビューをし、その内容を論文としてまとめ、構成を整える役割で執筆に携わった。

注) 本稿は、第一著者の丸山の経験を論文にまとめたものであり、本文中で「著者」や一人称で表現されるものは、丸山を指している。

第二著者の武内は、本稿を企画し、丸山にイ